

「デュプリケートブリッジの規則」の改定について

2018年3月31日(土)施行

ナショナルディレクター 仲村篤志

ブリッジの規則は世界ブリッジ連合が定めています。規則は10年に一度見直され、改定されます。今回デュプリケートブリッジの規則2017年版(以下、新規則)が発表され、JCB Lではルール委員会が翻訳しました。日本では2018年3月31日(土)から新規則を施行します。一部日程が残っているIMPリーグでも3月31日以降にある対戦では新規則が適用されます。

今回の新規則の改訂箇所は多岐にわたりますが、そのほとんどは語句の統一や、条文の再構成に当てられています。1997年改定、2007年改定のとくのように、プレイヤに影響を与える点で大きく変わったところは多くありません。ここではプレイヤが事前に知っておいた方がよい変更点を解説します。

なお新規則の全文はJCB Lのホームページでダウンロードができます。ディレクター用の解説など資料もありますのでご確認ください。新規則の製本版は2018年1月に発行の予定です。

第15条 間違っただボードかハンド

間違っただボードをプレイしたときの裁定が変わりました。旧規則ではオークション中であれば、一旦、中断して正しいボードを正しい対戦でやり直すことができました。オークション展開が同じなら調整はなく、オークション展開が違っていたときには調整スコアになりました。

新規則では間違っただボードでもプレイを最後まで続けなければなりません。本来そのボードをプレイする対戦相手など複数のテーブルで影響を与えて調整スコアとなる可能性があるため、ラウンド開始時の確認が今まで以上に大切になります。

プレイヤはディレクターのアナウンスでラウンドを確認して、プレイするボードと対戦相手を確認のうえプレイを開始してください。

第20条 コールの復唱と説明

旧規則では、パートナーのコールに対して自分がした説明が間違っていたと気づいたら、ただちにディレクターを呼ばなければなりませんでした。

この場合、説明の後に自分がコールしていると、そのコールが勘違いに基づいていたことがパートナーに伝わってしまいます。そのため新規則では、オープニングリードが表向きになるまでの間にディレクターを呼ぶことになりました。

オープニングリードまでにディレクターを呼べばパートナーに不当な情報が伝わることと、プレイへの影響を避けることができます。ただしオークションでは、対戦相手に間違っただ説明をしたままでするので調整の対象となることがあります。

説明の勘違いに気付いた時点で、自分がまだコールをしていなければ、すぐにディレクターを呼ぶのが良いでしょう。パートナーに伝わる不当な情報がないため、なるべく早く対戦相手に与えた誤解を解くべきです。自分がコールしてしまった後はディレクターを呼ぶタイミングは自分で判断することになります。

なお、以上のことは、自分の説明が間違っていたときに限ります。自分のコールに対してパートナーのした説明が間違っていたときは今までどおり、

- ・ディクレアラ側：オープニングリードが表向きになるまで

- ・ディフェンダー側：プレイ終了後にディレクターを呼びます。いずれも訂正は勝手にはしないで、ディレクターを呼んだら

えで指示に従ってください。

第23条 同等なコール

旧規則の第27条不十分なビッドにおける、「同じ意味を持つか、あるいはより詳細な意味を持つ合法的なコール」が、新規則では「同等なコール」として定義されました。定義の内容は

1. 取り消したコールと同じまたはほぼ同じ意味を持つコール。
2. 取り消したコールが示唆するいくつかの意味のうちの一部だけに限定するコール。
3. 取り消したコールと同じ目的（アスキングビッドやリレーなど）を持つコール。

新規則では取り消されたコールに対して置き換えられたコールが「同等なコール」である場合にはオークションに制限が無くなるので、より自然な結果が得られます。もちろん非反則者の損害が救済されていないとディレクターが判断したときは後から調整スコアになります。この条項は「不十分なビッド」と「順番外のコール」で運用されます。

第25条 コールの適法な言い直しと違法な言い直し

ビディングボックスのつまみ間違いの訂正で、旧規則にあった「考える間を置かずに言い直す」の条文が削除されました。新規則ではパートナーがコールしているか否かが判断基準となります。従来通り不注意なコールは言い直すことができません。「つまみ間違い」として扱うかどうかはディレクターが判断します。

第26条 コールの取り消し、リードの制限

「特定のスートの要求・禁止」、「任意のスートの禁止」という裁定を聞いたことがあるかと思えます。新規則では「要求」が無くなりました。

また取り消したコールに関係なく、オークションで特定したスートは全て「禁止」できなくなりました。リードの制限についてはデ

ィレクターの指示に従ってください。

第27条 不十分なビッド

新規則では、特定したデノミネーションをもう一度特定する、最も低い代のビッドか「同等なコール」の場合、調整が無くなりました。例えば2NT-2◇で2◇が1NTに対するトランスファーのつもりだったとすると、♡を特定する3◇のトランスファーに言い直すことができます。ただし最終的に不十分なビッドの影響があったとディレクターが判断すると調整スコアの対象になります。

第30条～第32条 順番外のコール

パートナーの順番を飛ばしてコールしたとき旧規則では多くの場合、パートナーのコールはいつもパスという裁定でした。反則者にとって「順番を飛ばしたのは私なのにパートナーごめんなさい！」です。

新規則では反則者がパートナーの順番を飛ばしても、反則者のパートナーは一度自由にコールができます。その上で反則者が「同等なコール」に言い直した場合、こののち制限はありません。

また反則者が「同等なコール」に言い直さなくても反則者のパートナーは「1回パス」の制限を受けるだけに規則は変更されました。

もちろん順番外のコールの影響が結果的にあったとディレクターが判断したときは調整スコアの対象になります。

状況に応じて反則者の取れる行動と、反則者のパートナーの取れる行動が規定されています。ディレクターの指示に従ってください。

第43条 ダミーが受ける制限

ダミーはディフェンダーのカードを見てはいけませんが、新規則ではディフェンダーもダミーにハンドを見せてはいけません。

第50条 ペナルティカードの処置

ペナルティカードに関する正当な情報・不当な情報の扱いが変更されました。

例えば、パートナーは順番外に♠Qをリー

ドしたとします。♠Qはメジャーペナルティカードになりました。

その後、ディクレーラーが♠をリードしたとしましょう。次のプレイの順番は♠Qを出した反則者のパートナーだとします。

旧規則では反則者のパートナーにとって、このトリックで♠Qがプレイされることは正当な情報ですが、♠Jを持っていそうだといいこと、♠に3HCPあるので他のスーツにアナーが少なそうだといいことは不当な情報でした。

ところが新規則では♠Qがテーブル上で表向きの間は正当な情報となります。反則者のハンドに戻ったり、プレイされると、反則者のパートナーにとって先ほどの情報は不当な情報となるように変更されました。

ただし、これらの情報が正当であっても結果に影響を与えた可能性が十分あったとディレクターが判断すると調整スコアの対象になります。

第65条 トリックの並べ方

テーブルの誰かがカードを間違えた向きに置いたとき、旧規則ではディクレーラーはいつでもそれを指摘できました。新規則ではディフェンダーおよびダミーも含めて間違えた向きに置かれたカードを指摘することができる期間が「次のトリックに自分の側がプレイするまで」に変更されました。ディフェンダーやダミーはこの期間を過ぎて指摘すると「不当な情報」が適用されることがあるので注意してください。

第66条 トリックの検査

自分がプレイした最後のカードを確認できるかどうかについて「次のトリックに入るまで」が「次のトリックに自分の側がプレイするまで」に変更されました。

第68条 トリックの「取り」または「取られ」の宣言

「取り」または「取られ」の宣言者は自分のハンドを見せることが明記されました。JC

BLではHANDBOOK「競技会の手続き」で、もともと開示することとなっていましたので混乱はないでしょう。ただし、ディフェンダーの場合は「取り」または「取られ」の宣言時にパートナーが異議を申し立てるとプレイが継続するのでパートナーに異議がないことを確認してからハンドを見せるのが良いでしょう。

旧規則では「取り」または「取られ」の宣言が成立するとプレイは終了しました。新規則では宣言に異議が申し立てられ、4人全員が同意すればプレイを継続することが可能になりました。プレイを継続する場合「取り」または「取られ」の宣言は無効になり、宣言の内容やそのときに見せたハンドの情報も無かったこととなります。不当な情報やペナルティカードの対象にはならないのでプレイの続行に同意するときはご注意ください。

以上、プレイヤーとして規則の改定で影響のある部分を解説しました。それ以外に新規則は、「第12条 ディレクターの裁量権」において「ディレクターは選定調整スコアの付与にあたっては、反則行為が起こらなかった場合にありそうな結果に可能な限り近いものに戻すように努める。」と変更されました。ディレクターが与える調整スコアが今までと違うなと思ったら思い出してください。

最後に多大な作業に無償でご尽力いただいたルール委員会、委員長の清水康裕さん、委員のロバート・ゲラーさん、長坂整さん、松田神一さん、宮内宏さんに敬意を表します。